

高大接続・大学入学者選抜の在り方についての これまでの主な意見

【高大接続・大学入学者選抜の在り方】

(今後の方向性について)

- 「高大接続」は、大学入学者選抜、大学教育、高校までの教育、これらを一体として捉えることが大切。
- 大学入学者の選抜の仕方が高校教育のありように非常に大きな影響を与えることに鑑み、高校教育をあるべき姿にしていくインセンティブを持たせる方向で、入試の抜本的な改革を進めるべき。
- 何のために生き、何のために勉強し、何のために学校に行くのか、ということを考え、志を立ててやっていくことが一番大事。こうしたことが大学入試の選考の中になると、どうしても知識や学力を中心に1点刻みで評価されるものになる。今の入試は、ある意味公平であろうが、学力だけで推し測ることが、いかに子どもたちの生きる力、やる気を減退させているか考える必要がある。
- 現在は、大学受験で伸び切ってしまう子が大半ではないか。大学に入学してからもう一度学べと言われても、高校でも学んだし、大学の先生の教え方にはやる気が出ないし、授業も行かない、という悪循環ではないか。
- 一部の大学では、第1学年から専門分化し、幅広い「能力の確認」よりも「選抜の論理」で入学者選抜を行っている結果、高校生が偏った一部の分野しか勉強しない、そういう状況になっていないか。今後、若者の人口減少に伴い、大学側に、学生獲得競争のために入試のハードルを引き下げようとする誘因が生じ、入試での能力の確認機能がますます薄れていきはしないか。
- 現状のAO入試は、やる気のある生徒の確保や人材の発掘をするといった目的で出てきたはずなのに、青田刈り、合格後の勉学意欲の低下といった指摘があるほか、大学等で定員確保のための手段にもなっていて、間違った方向に進んでいる。
- 個人の事情や環境により機会均等が損なわれたり、学歴格差が生み出されたりすることのないよう、また教育弱者が切り捨てられることのないように大学入学者選抜に

おける公正さが保たれるように十分配慮すべき。

(新たなテストの在り方について)

- 大学教育で必要な能力として、受験生にとって高校在学中に身につけた学力を丁寧に測る仕組みは必要。
- 高校教育において幅広い教養を身に付けさせるべく、大学入学者選抜を見直し、文理にわたる良問により「一発勝負」でなく複数回テストするという仕組みを、大学入学者選抜に組み込んでいくことが有効ではないか。
- 一発勝負だけではなくて、その前段階の学校における評価、達成度を反映した形で行うことが大事である。
- 一発勝負の試験は決して悪いものではない。それぞれが頑張って勉強して一発勝負に臨んでいくのも一つの方法ではないか。
- 高校2年から到達度テストが受験可能となると、受験勉強の早期化と先鋭化が助長され、日本の学校文化の象徴でもある部活動（課外活動）や学校行事に専念する生徒が大幅に減少する危険があり、きめ細かい配慮や検討が必要である。
- 到達度テストの実施時期については、Ⅰ期とⅡ期に分け、Ⅰ期は高3の11月の中旬ごろに実施し、その成績を推薦やAO入試の進学予定校に提出する。Ⅱ期は従来のセンター試験と同様に1月の下旬ぐらいに実施し、その結果で一般の大学進学に利用するというような形でやっていくのがよいのではないか。
- 高校の学習到達度については、1年生の時に取った単位は1年生の終わりに評価し、2年生のものは2年生の終わりに、3年生のものは3年生の終わりに評価する。この結果がその人の学習到達度の成績ではないか。受け直しはあっても良いが、高校での学習成果を正しく評価する形をベースに大学入試があるべき。
- 到達度テストの問題点として、1つ目に、テストの開発が難しい。実施時期が複数あるなかで各回の科目平均点を矛盾なく合わせられるか、どう整合性が取れるか。2つ目に、受験インフラの整備が難しい。3つ目に、学習環境による学力格差がさらに拡大するのではないか。4つ目に、半数を超える学生がAO・推薦入試で進学するなかで大学教育の内容をしっかりと見直さなければならない。
- 到達度テストを含めて、国としては一定の共通的な入学試験の仕組みを設ける。し

かし、最終的に、その結果を採用するのは大学であり、自分たちはこうした人材が欲しいということを踏まえて大学が独自にプラスした試験を行う仕組みにすればよいのではないか。

- 大学ごとの一発勝負の入試と高校の到達度テスト、これらの両方について、大学が独自にウエートを置き、両方評価するということがいいのではないか。
- 複数回行う試験のうち、どの部分の評点にウエートを置き、高く評価するかということ大学に選ばせるということもあるのではないか。
- 到達度テストについては、現行のセンター試験を活用することもあり得る。高校教育をあまねく広いものとするに資するよう、一定の改善（文系・理系を通じた共通教科・科目の指定や、活用力を問う問題の充実など）を加えるとともに、大学入学の資格試験的な位置付けをし、また、複数回の実施を可能とするほか、私立も含め、より多くの大学の入試で活用されるようにすることが有効ではないか。
- 大学入試への英語の外部検定試験の活用については、TOEFLは難易度が高すぎ、現在の英検は「使える英語力」を測るテストとは言えないため、文科省や大学入試センターが率先して、「国産」の英語力検定試験の開発に取り組むべき。

（各大学の入学者選抜の在り方について）

- 大学入試に関しては、大学の特徴によって入学の条件は異なり、大学の個性を反映できる形にしておくほうが、大学の独自性を育てる上で有効である。
- 高校までの教育は、社会人としての基本的な資質を養うため、高校までで完結する。その素養を得て、大学は専門家を育成するところである。したがって、大学入試は、どういう専門家を育成するかという各大学の思想によってバリエーションがあっ
ていいのではないか。
- 今のセンター試験を含めて制度の問題もあるが、大学がどれだけ自分たちの責任でいい人材をとるかという責任を果たしていないのではないか。
- 従来の一定の学力レベルを測る試験と同時に、小論文、面接等の手段で、何を学びたいのか、何を成し遂げたいのかといった子どもたちの「志」を問うべき。大学は、その志を受け取って熟慮し、その「人となり」を総合的に評価し、その志をいかに支援できるか、大学でいかに育成できるか検討して、入学の可否を判断するような入試をすべき。

- A O入試における面談は非常に有効。大学の先生が手間暇かけて、なぜこの大学を目指すのかということについて入学希望者を丁寧にみていくことが大切。
- 学力のみによる選抜ではなく、様々な能力・資質を持つ学生、さらに挑戦する学生が選抜されることは、学生同士の刺激にもなり、大学の活性化にも資する。大学入試では、語学のみならず、各種検定や資格取得の実績なども評価対象としてはどうか。
- 国際的に活躍できる人材を育成するためには、就職試験において行われるようなテーマを与えられて話すという能力も必要になってくるので、大学入試においても検討していくことが必要である。
- 高校留学と高大接続について、留学経験をその先の進路選択や将来設計につなげようとするモチベーションを持たせるためには、高校生での短期留学や海外体験が効果的である。
- 義務教育段階からの学習履歴、ポートフォリオの蓄積を入試に活用してもいいのではないか。
- 多様な入試は、多様な能力を伸ばしたり、評価したりするものとなっておらず、勉強したくない生徒の逃げ場となり、勉強で入学しようとする生徒の門を狭めて競争を過酷にしている。また、大学として学力に大きな差がある学生を抱えなければならない現状をつくっている。
- グローバル・リーダー、国家を担うエリートを養成しようとする大学は、一回の学力試験とすべき。グローバル・リーダー、エリートに必要な学力、気力、自己管理能力などを鍛えるためである。
- 今後、国際バカロレアの取組みを進める際には、バカロレアの各科目のレベルが決して高くない実態も含め、課題もあるので、それを解決して進める必要がある。

(高大連携等について)

- 大学入試を最終目標とするのではなく、高校教育は大学教育の前段階と位置づけ、教育内容をつなげていくことが高大接続の一番重要なところ。
- 高校での学びが大学での学びにつながるように、大学に入ってから履修項目に高校での履修状況を反映し、大学での取得単位にも反映して、早期に高度な講義に進めるようにするなど、達成度評価を反映するシステムを作っていくことが大事である。

- 到達度テストを導入する場合には、大学の受験年齢を下げ、達成度があるレベルに達している場合には高校を卒業し、大学に入学できるようにしてはどうか。
- 高校の修了前に大学入学の選考があり、大学から大学院へ、又は社会に出るときも、それぞれの課程の修了前に選考があることが問題。夏季休暇の終了時から全ての学事暦を始めれば、学事暦の終了時に到達度の評価ができる。つまり、修学後にそれを評価して次に進むというあるべき順序で実施することが可能になる。
- 大学から最先端の情報を高校に提供して、高校生の将来にとって何が必要か、適切な情報提供をすることが望まれる。
- 高大接続においては、大学入試の変更だけでなく、大学とは何か、何を勉強するのかということを知り、ミスマッチを解消する上でも、高校の生徒が早めに行って大学の授業を受けてみることは有益であるし、大学に入学してからの意識付けにもつながる。